鳳凰の謳舞

由宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鳳凰の謳舞

【Ｎコード】
Ｎ９７２３Ｉ

【作者名】
由宇

【あらすじ】
三日月の宵、一筋の彗星が流れ堕ちるとき。
一人の老賢者が死んだ。
二人の子供が目覚めた。
そして。
三つの運命が、紡がれる。

プロローグ　初宵

ほぼ闇と言ってもいいほど暗いとある王城の室内で、コツ、と杖が石造りの床を打った。
黒ずんだ金で描かれた複雑で繊細な紋様が、ぼうと光る。
床から放たれるその金の光に照らされた人影は、黒いフードを目深に被ったまま、何かを小さく呟いた。
格子の嵌められた小さな窓から覗く夜空に、――――青紫の、彗星が流れる。

その夜、一人の老賢者が死んだ。
その夜、二人の子供が目覚めた。
その夜、三つの運命（さだめ）が動き出す。

この世界には、人と魔物という2つの種族が生きている。
人を統べる真王（おう）と、魔物を統べる魔王。
双方は太古の昔より対立し、決して打ち解けることはない。
それゆえ、人は魔を忌む。魔は、人を忌む。
それは、決してあるはずがないはずだった。

人と魔が、交わることなど。
あってはならぬことだった、――――筈だった。

その癖に、心を持ち合う双方の種族の雌雄は互いに禁忌と知りながら愛し合うこともある。
その果てに人間であった女は魔物の子供を孕み、そして子を生(な)した。
それが禁忌と知りながら。
――――そして、俺の母は死んだ。
子である「俺」のことなど、省みぬままに。
命を賭けて生んでくれた母を恨むことはいけないと知りながら。
母は村で私刑にかけられ死んだ。子である俺は、最後の慈悲とやらで森に棄てられた。
人と魔を隔てるもっとも危険な山、カルア山脈の原始林に棄てることが慈悲にあたるのかどうかはわからないが。
生憎ながら人と魔物、の中でも人に近い巨人族との混血らしい俺は、身長は人間の2倍近くあるくせに
ほぼ毎日を生死をかけたサバイバル状態で生き抜いてきただけあって馬鹿強い。
人とは絶縁状態だし、半魔のくせに魔物たちのところにいけるほど神経図太くないし。

大きく黒い夜空にかかる鋭い鎌の様な三日月を見上げたまま、ぼうと思う。
何かが足りないまま、生きてきた。
半人前で。半魔前（？）で。
人間は、生きることに意味を求めると昼に烏から訊いた。
俺に、意味はあるのだろうか。
生きているがゆえに生きて。それだけではいけないのだろうか。

そう考えにふける、その一瞬後。

その言葉を考えることを、すぐに寸断する存在が、降ってくる。

プロローグ　初宵（後書き）

はじめました。
完結目指して頑張りたいと思います。

第一話　上弦の月

生きることのなんたるかなど、似合わないことを考えるなとでも言うように、仰いだ月の端が、びかりと目を眩ますように輝いて。
反射的に目を細めて、網膜に焼け付いた光の影の向こうを睨んだ。
そして。
その影が、「近づいて」きて。

息を呑む。
それが何かなど考える間もなく。
飛び跳ねるように立ち上がって。
受け止めようと、手を伸ばす。

そして。
思ったより優しい衝撃と共に、腕の中に納まったのは。
俺の腰ほどにしかないんじゃないかと思うくらい小さな、人間の娘。

あっけなく気絶しているこの娘が、上に潜んでいたとは思えない。
娘の格好は見たことのない繊細な生地でできた、斬新すぎるデザインのもので。
どうしたって目立つ。ついでに木の上なぞにいられるはずもないものだ。
鳥に攫われたかもしれないが、それなら鳥の影に気付くはずだ。
何処から来たのだろう。何故来たのだろう。
この見るからに可憐な娘が、カルアのこの山の中で、生きていけるのか。

戸惑い、そして。ひとまず手当てをしようと、立ち上がる。

かつて魔猟師共が建てた粗末な小屋の納屋の戸を蹴り開けた。
小屋部分は屋根が抜けていたから、納屋の方がまだ雨露は凌げるのが理由だが。
寝床代わりの藁束に抱えてきた娘を寝かせて、入り口で石を打ち合わせ、火を焚いた。
火を焚いてしまえば、やることも思い当たらず、改めて視線を娘に向けた。
かすかに胸元が上下しているから、呼吸しているのは間違いない。
腕や足や身体も、抱えている限り不自然な所はなかったから、きっと高い所から落ちたのに体が驚いてしまっただけだろう。
哀れなものだと、かすかに哂う。
恐ろしい思いをして、気絶して、そして目覚めたら、目の前に居るのは人ではない巨体なのだ。
一体どんな反応をされるのやら。そんな風に自嘲的に思うのは、拒絶されるものと決まっているからだ。
人である彼女は魔を受け付けない。――たとえ半分人の血が入っていようとも。

ぱちり、と。焚き木が、爆ぜる。

炎の光が、納屋の中の影を揺らめかせた。じっと火を見つめていた俺は、ふと顎を持ち上げた。
横たわっていた少女の影が、動く。

「――うわ、ハイジ的ベッド・・・」

呟く声はやはり女というよりは少女らしいもので。

少女は暫く髪の毛に付いた藁屑を無心に払っていたが、ふと首を持ち上げて。
此方を確認すると同時に、固まった。
その目だけが暗い室内の中で、焚き火の光を受けて黄色く光っていた。

第一話　上弦の月（後書き）

上弦の月ははじまりという意味で。
・・・でもまだはじまってないですね。

第二話　暗中模索（前書き）

視点が少女に変わります。

第二話　暗中模索

名前。香凪珠璃、名前の由来は珠や瑠璃のように輝き、愛される存在になるようにって意味らしい。
御生憎ですが、お母様お父様。私は見事なまでの名前負けな平凡女になりました。
年齢。２０歳、この間飲酒解禁したばっかりの大学２年生。
はじめて県外へのゼミ旅行。目的は、Ｔ県の山間にある碑文、っていうかそこの温泉だったんだけど。
申し訳程度のぼろぼろの舗装をされた細い山道でずるり、足を滑らせて。
あ。
その声を発したのを最後に、目の前が一面、真っ白な曇天に変わられて。
襲った浮遊感を最後に、意識は途切れる。

ぱちり、と。焚き火が、爆ぜる。
ぺたんと座り込んだ太腿をちくちくと刺す、何処か懐かしい藁の束の上に横たえられていた自分。
此方に背を向けていた巨体が、ゆっくりとのめりこむように傾いて、僅かに此方に顔を向けられる。
無意識で制服のブレザーやスカートについた藁屑を払っていた、手が止まる。
中世あたりを舞台にしたファタジー映画のワンシーンみたいだと、現実離れした光景を前に固まった。
え、この人って何。こんな背の高い人なんてみたことない。
まるで巨人みたいだ。将来はガリバー旅行記のガリバーみたいにな

るんじゃないだろうか。
いや、違うガリバーは確か人間だった。つまり小さいのは私のほうか、私小人役なのか！
・・・ここまで混乱しておいて原作者さんに申し訳ないけど、ガリバー旅行記私読んだことないんだよね。
世界史の資料にたしか挿絵が載ってたよなってそれくらいで・・・
うん、ごめんなさい。
とりあえず目の前ののっぽさんのことは置いておいて。
状況を掴もうと一度深呼吸を深くする。
同時に藁の埃が口の中に入ってきて、それはやっぱり不味かった。
思わず顔をしかめてぺっと吐き出すと、目の前ののっぽさんが首を傾げた。
ん？・・・目の前、

「っ・・・」

どうやら考えに耽っているうちに様子を見に近づいてきたらしい。
全く気付いていなかった自分に驚いて、ついでに仰け反るように肩を引いて彼から離れた。
好奇心を抑えきれない様子だった彼の表情がかすかに曇る。
・・・これ、絶対。誤解されてるよね。絶対拒否られたって思われたよね。
違うのよのっぽさん。いやだって、私男の人に免疫ないんだもん。
しかも藁と一緒に唾吐いたばっかりだし。汚いよ、汚れちゃうよのっぽさん。
ただでさえ表情が出にくい体質で勘違いされやすいのに・・・。

「・・・おまえ、大丈夫、か？」

急に案じるように声を掛けられて、おうと僅かに驚く。

たどたどしい声は、こんなに大きな体をしているのに、どこか庇護欲を感じさせる感じで。
さっきのはどうやら流してくれたらしい。ありがたいありがたい。

「はい、・・・すいませんが、ここって何処ですか？」
「カルアの原生林だ。」

カルア。カルア。原生林。原生林。
そんなとこ、日本にあったっけ。でもな、観光地結構カタカナつけたりするからなあ・・・。

「ええと・・・」
「・・・聖国フィルベリナのアジム村、近く。」

・・・・・・まてまてまて。

聖、国？フィルベリナ？安心院・・・アジム、村？
一体・・・どこの、ファンタジー世界なんだろうね？

第3話　現状把握

「私の名前は、香凪珠璃。名前が珠璃。苗字が香凪。」
「シューリ・・・カナリィ？」
「珠璃、香凪。・・・シュリ＝カナギ？」
「シュリ・・・カナギ。」
「そうそう。」
「俺、アルク＝マド。半巨人、マドの姓、決まり。」
「アルク・・・アルって読んでもいい？」
「いい。」

こくんと一つ頷くこの巨人、いや半巨人らしいアルクという彼。
私が聖国フィルベリナのアジム村とやらに近いカルア山脈の原始林なんてものに住んでいるらしい
彼のことなど知る由もなく。というよりも、そんな場所を知っている筈もなく。
とりあえず現状把握のために会話をぽつぽつと始めた結果が、冒頭の発音レクチャーである。

まあ、とりあえず。
高校で大学受験のために習った生物でホルモン関係で出てきた。
成長ホルモンの過剰分泌で起きる巨人病、だっけ。それの可能性も、一応考えた。
けど。幾らなんでも、成人している私（約１５０ｃｍ）の背丈の２倍以上ある人なんていない。
いや、それに近い人ならいるだろうけど。前バラエティ番組でみたけど、世界一で２７０ｃｍくらい、だったはず。
軽く３ｍは越していなきゃおかしい彼が、ギネスに認定されていない筈がない。

ついでにそんな国単位でカタカナ表記な場所に、ついさっきT県に到着した私が行けるはずもなく。

巨人がいて。半巨人がいて。カタカナの国にいて。
どこのファンタジー小説の中に、迷い込んじゃったんでしょうね私。

「シュリ？」

唯一の救いは、言葉が通じて、アルが私を拾ってくれたこと。
心配するように身を屈めて私の顔を覗き込んでくるアルは、優しい。
また、半巨人はどうやら人に厭われる種族らしく、他に人がいない。
だからだろうか。アルは、私が聞いて引かなかったことで、大分安心したみたいだ。

私は、なんでもないよ、と淡く笑みを浮かべてみせる。
そして、座って身を屈めても立った私の頭よりちょっとしか低くならないアルを見つめた。

「ねえ、アル。私、ここのこと何も知らない。お願い、知ってること・・・全部、教えて。」

アルは、ただ小さく、わかったと頷いた。

第3話　現状把握（後書き）

つたない文章で申し訳ありません。
まだまだ本編にも入らない・・・。

第４話　世界説明（前書き）

アル視点です。視点定まらず、申し訳ありません。

第４話　世界説明

シュリは不思議な娘だと、立てた膝に肘をついて思う。
この世でも珍しい黒髪黒目、そしてその髪を首筋を隠す程度まで切りそろえてある。
髪の短いのは女の恥だ。せめて背中までは伸ばさないと、女は女として認められない。
背丈は俺の腰にぎりぎり届かないくらいで小さい上に、体も細いが女の身体はしている。
盗賊が攫ったのならさぞ良く売れることだろうと考えられるのだが、シュリは盗賊などとは比べ物にならない大物に攫われたらしい。

シュリはニホンという島国のＴケンとかいう地方から来た。
シュリの名は珠璃と書く。みたことのない字だ。聞いたこともない響きだ。
シュリは学校に行っていた。それも、一番高ランクの学校だ。
そんな学校に行けるような家柄の娘が、こんな格好をしているはずがない。

シュリは、自分が神隠しにあったという。
神に攫われ、関わる筈もないこの地に落とされたという。
シュリは、この世界で生きていかなければいけないという。

俺は、シュリが好きだ。
俺を、否定しないから。
半人半魔の半巨人（マド）は人に厭われる宿命（さだめ）。
それを、シュリは気にしない。
たとえそれが無知ゆえのものであったとしても。
たとえそれがこれから先、失われても。

はじめから俺を厭わなかったシュリを、俺は厭うことはないだろう。

俺は、シュリの求めを受けて、ゆっくりと口を開く。
相手に対してきちんと喋る言葉は、随分久しぶりで。

「この世界には、魔族と人間がいる。
魔族の頂点に存在するのは魔王。魔王が現れると魔力は増す。今は魔王は眠ってる。
このカルア山脈から西は全部、魔族の世界。
魔族と人間は互いに殺しあう存在で、憎みあってる。」

瞬いたシュリの黒い目に、橙の灯が奔った。
腑に落ちた、という様子で俺を見直すその顔が少し怖くて、視線を逸らす。
シュリはそっか、と小さく呟いただけで、先を促すようにまた唇を結んだ。
俺は、少し緊張して乾いた喉に、すうと息を吸い込んだ。

「人間は聖国・帝国・皇国・神国の４つに別れてる。
５年くらい前までずっと聖国と帝国は領土をかけて戦ってた。今、皆停戦中。
元は魔と人の国だけだったから、言語とか文字とかはみんな同じ。
ただ、魔族でも人間でもない存在が聖霊。
聖霊は世界そのもの。どちらにも属さないで、どちらにも属す存在。
人間は魔を厭うから、聖霊を神のように崇めてる。」

藁の茎で納屋の床に線を引き、大まかな世界図を描く。

左半分を魔領とし、カルア山脈を境に右半分の一番上の北が神国。
真ん中のカルア側が皇国、その隣が帝国。そして下が聖国、となる。
大雑把なその図を興味深く覗き込んだシュリは、そっか、と小さく呟いた。

「――――だから、アルはこの中間のカルア山脈にいるんだね。」

他に行き場がなかったのだ。
俺は何も言わずに一度だけ、頷いた。
シュリは、ただゆっくり、微笑んだ。

第４話　世界説明（後書き）

簡単な世界観説明です。
そのうち、珠璃の目で見た世界も交えてもう一度正確な世界観説明を行いたいと思います。

第五話　契約成立

いつの間にか、眠りの夜はまた目覚め始めていた。
仄かに空の闇が濃紺に変わるその風景は、何処か幻想的というよりは寂しさを感じさせる。
ぱちりと、大分白っぽくなった焚き木が啼いた。

「・・・人と魔は、本来交わるべきじゃないもの。だから。
俺は、異端。どちらにも、受け入れられない。」

人は、魔を憎む。
魔は、人を憎む。
憎悪。それが、人と魔の間に唯一あってもいい関係なのだろう。
そして、俺はそれ以外の関係の中で生まれた化け物だ。
受け入れられてはならない。存在しちゃ、いけない。

「それで、いいの。」

ぽつりと、シュリは呟いた。俺に確認するように。
いっそ痛いくらいの静けさでもって、俺の目をじっと見つめて。
口を噤んだ俺に、シュリはもう一度繰り返す。

「アルは、それでいいの。自分の所為なんかじゃないのに、勝手に嫌われて。
おまえはマドだからって、それでこんなところに一人ぼっちで。・・・悔しくないの。」

その言葉も、何もかも。
まるで夢の中で言われたみたいで、そのシュリの唇から零れた言葉

だなんて、信じられなかった。
シュリは、眉根を寄せる。そして、馬鹿みたいと吐き出した。

「マド、それが何よ。いいじゃない、身長高くて力強いくらい。
成長ホルモンかなり出たなら３ｍくらいおかしくないって、流石にギネス載るけど。
腹立つ、私こういうの大っ嫌い・・・！」

中間部分はよくわからないけれど、（ほるもんとかめーとるとかぎねすとか、誰？）
とりあえずシュリは怒っている。それも、かなり。
乱暴にあー、と唸りながら自分の頭をかきむしる姿は、どこか痛々しいけれど。

嘘だ、と理性が否定した。マドを否定しないどころか、否定されて怒るなんてありえない。
嬉しい、と心が喝采を上げた。マドのために怒ってくれる人が、いた。
両方がせめぎあい、呆然としている俺の頬を、仁王立ちした小さなシュリが、ばちんと不意に叩いた。

・・・え？

ふー、ふーとまるで背中の毛を逆立てて怒る猫みたいな息遣いのシュリは、ぎっと俺を睨む。
状況がつかめない俺、硬直。怒り狂うシュリは、険のある声で言った。

「ぼけっとしてるトコ悪いけど、あたしここに住むからねアル！
人種差別するやつ等のトコにいってたまるかっ・・・！！

とりあえず頼んだからね！」
「・・・あ、えと、え？あ、はい。わかりまシタ・・・」
理解も何もできないままにとりあえず頷いた俺を確認したシュリは、凄い剣幕で外に飛び出す。
首を戸口からひょいと出してその背中を見送ると、シュリは木立の影に隠れて、しゃがみこんだ。
耳を澄ませれば、
「とりあえず力仕事はアルいるしあたしＲＰＧの補助系になれればいいかなっつーかまじふざけんな遺物ども今更差別とか古いんだよいつかぶっ倒して改めさせてやるくそ、」
・・・とかいう呪詛にも似た呟きが聞こえてくる。
とりあえず俺は何も聞かなかったことにして、薪拾いに出かけることにしたのだった。

第五話　契約成立（後書き）

同居契約は一方的に叩きつけられました。
珠璃はもっと冷静沈着！を望んでたんだけどな・・・↑
どうもパワーバランスは
珠璃＞＞アル
となりそうですＯＴＬ

第六話　半人前

文明機器が一切ない世界って、想像以上に不便だと知った。
ここは元いた世界での科学の代わりに、魔法・・・正式には、魔道術が用いられている世界。
アルは人里に降りたことがないから上手くは教えてもらえないけど、何かのツテでアルに聞く話によれば人は魔道が使える人と使えない人に分かれているらしい。
そして、使える人、イコール魔道士はその魔道の力でもって使えない人を助けたりして交流をしているとか。
例えて言うなら、昭和の頃の電気屋（魔道士）と電化製品（魔道術）みたいなものかな。
ついでに、技術の差も昭和初期（低）から平成（高）までさまざまあるという。
一番上の人はやっぱり国家魔道士とかになってるらしい。底辺の人はうちでの自称・超能力者程度だけど。

まあ、とりあえず。
このファンタジー世界に文字通り「落ちて」からおよそ一月。
力仕事はアルに任せ、私はこの世界に慣れるべくさまざまなことを頑張っています。
といっても、野ざらしの場所でも平気で寝ているアルに住居を持つことの重要性を説いて納屋を増強したり、
アルの拾ってきた薪を燃やして、大量に蓄えられた調味用の塩や香辛料を使って質素な食事を用意したり。
それらはなんでもアルを幼い頃面倒見てくれた奇妙な「クソ親父」

がどこからか買い占めてきたのだとか。
アル、・・・恩人にそれはちょーっと酷くないか？
そのアルは薪拾いから始まって結構遠くまで狩りに駆けて行ったりするので、
その間もし獣や盗賊などのならず者が来たら不味くないかという相談をしてみた。

「シュリ、俺守る。」
「だって狩りで、結構私一人で留守番してるじゃん。」
「・・・俺守る、」

彼の顔を真摯に見上げながら問題点を挙げれば、アルは困ったように視線を彷徨わせた。
彼は何の所以か、私を絶対に護ると決めたそうで、おかげで安全そのものな生活を送ってはいるのだけれど。
最初の一声よりずいぶん弱った声で、それでももう一度主張するアル。
別に困らせたいわけじゃないんだけどなあと、私は僅かに苦笑した。

「護身術でも身に付けられないかな、できれば魔道術とか、腕力かからない感じで。」
「・・・俺、魔道使えない。」
「あ。・・・いや、アルは使えなくてもいいよ！うん！」

あらまあ、やっちゃった。すっかり縮こまってしまったアルに諸手を上げて励ます側に回る。
胡坐をかいて背中を丸めるアルは、それでも私が立ち上がって膝の上に載ってやっと頭と頭が同じくらいの高さになるのだから困る。
励ましづらいじゃないか。そうこっそり思いながらも、言ったらそ

れこそどん底まで落ちそうなアルの肩を揺さぶり、励ましの言葉を投げる。
アルはマドだ。マドを含む、人と魔の混じった「半魔」は、色々な欠陥が生じるものなのだとアルは以前話していた。
アルには巨人の血を告ぐものでありながら体が巨人の半分ほどにしか成長しないこと、また魔術全般を扱えないという体質がある。
後、ひょんなことから派生した話では、アルがその、男でありながら「男」ではないという・・・まあ、それは逆に好都合というものだろう。

「もしさ。私が魔道使えるようになれば、私とアルはかなり強くなれるよ。」

そう言った私を、一度硬直したアルはおどおどと私の顔色を窺うように視線を合わせた。
安心させるように微笑んで、頬のすぐ横にぴっと人差し指を立てる。

「私は魔道ができるけど、力がない。
アルは力があるけど、魔道はできない。
二人足して割れば、調度一人前でしょ？」

そういう意味で、一人で一人前の人なんていない。人は支えあって生きるもの。
――半人前でしかない人は、だからこそ片割れというべき存在を求めるのだから。

ま、私がアルの片割れになるかどうかはまだわからないけどね。
それを言ったら逆に疑心暗鬼になるのは目に見えてるから言わないけれど。

「・・・シュリ、魔道・・・頑張る？」
「うん。」

とりあえず、今は頑張ろう。
この心優しい彼と、共に護りあえるだけの力が欲しいから。

第六話　半人前（後書き）

本文だけ見てると珠璃がまるでアルクを利用しているようにしか見えなかったので補足。
片割れになるならないは自分の意思で決めるものではありませんから。

・・・タイトル４文字じゃなくなった・・・。

第七話　利用不可

先日の魔術習得に関するやり取りの後、アルは手懐けたリンクスという鷲の子に手紙を託した。
例の「クソ親父」にそれを送れば、そいつが嬉々として教師役を連れてやってくるというのがアルの弁。
ならやっぱりクソ親父呼ばわりはやめたほうがいいんじゃないだろうか。

って、会う前までは思ってました。
ええ、本当に。

その人たちがカルア山脈の中、朽ち掛けたこの納屋を訪れたのは、それから一週間くらい経った頃だった。
調度アルが近くの森で薪拾いの最中で、私は朝食に使ったお皿代わりの石のプレートを隣の川で洗っていた、ところだったんだけど。
ふといつもと違う気配を感じて、振り向く。
こっちの世界に着てから感覚器官とか運動神経とかが3割増しくらいで上がってるからこそ気付けたのかもしれないけど・・・。
まあこれは多分環境の違いによるものだと思う。うん。

その気配の主は逆光で良く顔は見えないけど、その先にいたのは、親子みたいに年の離れた男の人二人だった。
片方は赤茶の髪を後ろに撫で付けて無精ひげを蓄えた、壮年の結構がっしりとした体つきの男性で。
もう片方は対照的に、青銀の髪を無造作に流して、若い色白のタレントみたいな細い体格の男の子。
え、この人たち何？アルの知り合い？

こっちに来てから人と対峙したことがないまま一月以上を過ごした私は、
アルといることで大分なれたと思ったはずの人見知りの再発を感じながら、固まっていた。
・・・ああこの人たちちっちゃいなあ、と現実逃避のように考えてしまった私は、大分基準がおかしくなっていると思う。

「君がアルクとここで暮らしているシュリだね。」
「・・・・・・はい。」

奇妙な膠着を裂くように口火を切ったのは、赤っぽい男の人だった。
私は無意識のうちに洗い終えていたお皿を持ってしゃがんでいた身体を立ち上がらせる。
二人は物怖じすることもなく、近寄ってくる。私は、ただじっと二人を睨むように見つめていた。
壮年の男性はじいっと私の目を見る。その表情がどこか柔らかいのに、眼光は冷徹そうな色を孕む。
観察されてる。アルといる間は一切存在しなかったこの馴染んだ色に、どこか恐ろしさすら感じた。
次に淡々と唇を動かしたのは、若い男の子の方だった。

「君は、アルクをマドとして嫌わなかった。利用もしないのか？」

まるで審査だと、薄く頭の片隅で思う。彼らは真面目な顔をして、返答を待つ。
私は一度視線を伏せた。そして、緊張して乾いた口を開いた。
彼らが待つのは、「正論」などではない。だから、聞こえは悪くても自分の言葉で語ろう。

「私は、彼を利用します。」

さっと、空気が殺気を帯びた。
気にするな。続けろ。自分に、言い聞かす。

「だからこそ、彼が私を利用できるようになりたい。
利用しあえる関係になりたいから、アルに魔道術を習いたいといいました。」

真剣に告げれば、目の前の二人の険のある顔が、やがて綻ぶ。
壮年男性である赤いほうが先に、私に手を伸ばした。軽く叩くように、頭を撫でられる。
２０という年齢にもなればそんな行為をされるなんて滅多にないことで、少しだけこそばゆい気分になる。
彼は、威厳のあるテノールの声でもって可笑しそうに呟いた。逆光の中で、金色の目が揺れる。

「利用しあえる関係か・・・それは利用じゃなくて信頼という関係だな。」
「なかなか骨のある子ですね、貴女は。素質もあるようですし。」
青銀の男の子の声が語尾に重なる。見るからに美青年、といった顔立ちが、くすりと上品に微笑んだ。
その手が、そっと伸ばされる。肩でも掴むつもりなのだろうかと、実はすっかり硬直してしまっている頭で考えた。

「覚悟の色も美しい・・・いいでしょう、是非僕のお嫁さんに」

・・・はい？
ぴしりと思考回路すら固まった私の頬に、目の前の男の子の指先が触れたその瞬間。

私はぐんと、宙に抱き上げられた。

暫くの静寂の後、見下ろせばそこには薄ら汗の滲んだアルの頭が。
どうやら肩に担ぎ上げられたらしいと一つ納得したところで、さっきなんかありえないことを口にした青年を
アルが睨みつけているのに気付く。

「誰が婿を呼んだ、シェルラグナ。」
「しかし、素敵な女性ではないですか、アルク。」
「シュリ、シェルラグナはだめ。惚れっぽい、女の敵。」
「手酷い評価ですねえ。」

あはは、と頭に手をやるシェルラグナ？と呼ばれたこの青年。
・・・あのアルに女の敵とまで言わしめるとは、一体何をやらかしたのだろう。
いつの間にか赤い人まで参戦して非情に不毛な言い合いが続く中、
アルの肩の上でぼんやり考えた。

あ、ちなみに。赤い人がアルの言うところの、「クソ親父」でした。
えっと、うん、そっか・・・。

第七話　利用不可（後書き）

登場人物が増えました。
ちなみにアルの正式な名はアルク＝マドです。
たまに作者が忘れてるのでここにメモ↑

第8話　名乗り人

「さて、あらためて自己紹介をしようか。」

そうさらりと青銀の髪をわざと靡かせて、目の前の青年はさわやかにほほえみを浮かべて私に向き直った。
しかしながら、その背後でにまにまと私とアルを見比べる赤い人が見えることで、そのさわやかさは大半が割り引かれてしまう他にも、私がその肩に乗っているアルが未だ険悪な表情で彼をにらみつけていることで、彼の笑顔が何よりも嘘くさく思える。
しかしながら、朝に彼らが来てからいっさい正式な自己紹介の無いままに日が高く昇り降下し始めている今、
一人置いてけぼりの珠璃としては早く紹介がほしいところだ。
珠璃はとりあえず、珠璃に手を出すなと威嚇を続けるアルの頭をぺしりとたたくことでそれをやめさせた。
不満顔のアルは、それでも珠璃のいうことだからとそれを警戒程度にちぢめておいた。
ほう、と赤い人が一層にんまりとアルを眺める。
青年は肩をすくめて見せてから、それから優雅に頭を下げて礼をとった。

「僕はシエルラグナ＝W＝クラウン。アルクから依頼をうけましたからね、君へ魔道をお教えしましょう。
僕のことは是非シエルと呼んでくださいね。」

名乗りを終えて、シエルラグナ・・・シエルははい、と赤い人の方を振り向く。
バカにするように、というかアルをバカにする為だけにものすごいアホ顔をしてみせてきていた赤い人は、

それに気づくとさっとまじめな顔に戻った。

「ん、俺か。俺はホムラ＝F＝クラウンっつーんだ。アルクのことを赤ん坊のころから見てる、恩人だからな。
シエルに教授を頼んでやったのも俺だ、感謝しろ。」

・・・ここまで分かりやすい唯我独尊な人は初めて見た。
ちなみにアルクはその挑発にとてもたやすく乗ってしまって、その視線だけで人一人が殺せそうな程の殺気を垂れ流している。
あきれ顔でシエルも彼を見やる。

「・・・クソ親父、」
「そんなだからアルクに嫌われるんですよ、ホムラ・・・」
「聞こえんなあ。」
「・・・・・・」

私はアルクの肩をぽんぽんと慰めるようにたたいた。シュリ、とアルクはむっつりと名前だけを呼ぶ。
ため息を吐いて、私は唇を開く。

「シエル、これからご教授お願いします。アル、降ろして。
ホムラ＝F＝クラウン、お疲れさまでした、もうお帰りいただいて結構です。」

ぽかんとする来訪者二人を放置して、アルが機械的に私を肩から降ろす。
私はきびすを返して納屋の中へと入っていった。
結局半日以上抱え続けた石のプレートは、すっかりぬるく温められていた。

第8話　名乗り人（後書き）

今回は短め。ポメラって接続面倒くさいですね。
タイトルは適当なのでスルー願います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9723i/

鳳凰の謳舞

2010年10月15日23時40分発行